

1 森林公益性と各調査項目の考え方

前期計画の成果と課題をふまえ、後期計画を策定する上で、5年間という時間の流れをもとに、事業対象地の自然・社会条件（ここでは観光利用としての社会条件を指す）も変化している。

その自然・社会条件の変化を、後期事業計画へ機能的な形でとりいれる必要が生じていることから、ガイドラインに基づき実施する各調査の目的とポイント等について整理した。

なお、本調査結果をもとに、事業対象地の3つの森林公益的価値の再評価を行い、後期計画に反映することとする。

■現地調査の視点（「京都三山森林景観保全・再生ガイドライン」の3つの森林公益的価値）

景観形成価値	斜面防災的価値	地域生態系保全価値
<p>調査の視点-1 山麓寺院の借景林として効果的な整備箇所の抽出</p> <p>調査の視点-2 登山利用者の増加に伴う森林景観の分析</p>	<p>調査の視点-1 危険木・林相改善すべき場所の抽出</p> <p>調査の視点-2 斜面防災に配慮した危険性の高い場所の抽出</p> <p>調査の視点-3 倒木地の裸地化に伴う土砂流亡危険地の抽出</p>	<p>調査の視点-1 現状の森林被害状況の把握</p> <p>調査の視点-2 生物希少性に配慮した保護管理すべき種や場所の抽出</p>

植生図作成調査（植生調査、毎木調査含む）

「事業計画」策定から5年が経過した小倉山全域では、シカの食害（森林病害虫による被害を含む）が進行し、また、伐採等の処理が行われたことから植生に変化がみられることから、基礎データの作成として植生図の見直し調査及び取りまとめを行う。

景観調査（林内：自然的要素）

小倉山の森林景観を対象に、森林景観の価値や可視領域について現地調査、G I S等を用いた空間分析処理を行い検討する。また、登山利用者の増加に伴い、林内からの森林景観価値についても調査および検討を行う。

景観調査（林外：歴史的要素）

小倉山山麓の歴史的寺院等を対象に、小倉山の森林が変容することにより、歴史的寺院の景観にどのような影響を与えてきたのか過去の文献等から得た写真と現在とを比較しながら森林景観価値について検討を行う。

モニタリング調査 (苗木の生育調査)

整備工事に伴い植栽された苗木の成長及び健全性の把握を行い、モニタリング調査を行うとともに、後期計画において、樹種を選定するまでの基礎資料となるよう取りまとめを行う。

植生図作成調査

アカマツやコナラが病害虫被害により枯死した後に、ソヨゴなどの浅根性樹種が生長している。浅根性樹種は台風などの影響で倒木しやすく、危険であることから、前期計画策定時から5年が経過した現在、風倒による被害が予想される植生の分布を把握する。

傾斜区分調査（追加調査）

小倉山では急傾斜地と緩傾斜地が多い地形である。特に前期計画時での調査では斜面で剥離性の微崩壊がみられ、今後整備を進めていく上で、斜面防災的に配慮すべき場所の抽出の必要性が生じた。また、後期計画をすすめていく上で、整備地の維持管理作業や市民向けの植樹イベント地を選定していく上で安全に配慮したエリアを検討する必要性が生じたため、本調査を通じて抽出することとした。

倒木調査（追加調査）

台風21号に伴う倒木が山地内に多くみられる。倒木地では裸地化が起こり、土壟侵食（エロージョン）等が、生じる可能性もみられることから、今後の推移を検証するために倒木位置の把握を行う。

植物相調査

本業務委託の基礎データとして、現況の植物相を把握し、森林再生後の比較検討を行う。また、森林整備工事の影響を踏まえ、保全する種（希少種や地域種）の調査も併せて行うものとする。特にマツグミ（京都府RDB：準絶滅危惧種）が寄生したアカマツは枯れにくいという話もあることから、マツグミ生育地とアカマツとの関係にも着目して調査を行う。

忌避植物及びナラ枯れ調査

小倉山の森林被害を把握するため、シカの食害を受けない忌避植物の生育状況、帰化植物及びナラ枯れの枯死状況の調査を行いうものとする。

シカの影響と植生復元調査（追加調査）

シカの被害が著しい小倉山において、防鹿柵の効果とシカによる食害とを比較検討するため、柵内外の同環境で植生調査を行うものとする。

調査箇所は平成26年度に施工した防鹿柵の内外（8基計16箇所）で実施する。

光環境調査（追加調査）

前期計画で確認されたホンゴンソウの生育環境は林冠の空隙率や光環境に依存する可能性が高い事が報告されている。

そこで今後継続的なモニタリング調査が必要な希少な種であることから、現況の個体数、環境条件の詳細な調査を実施する。

2 景観形成価値に関する調査

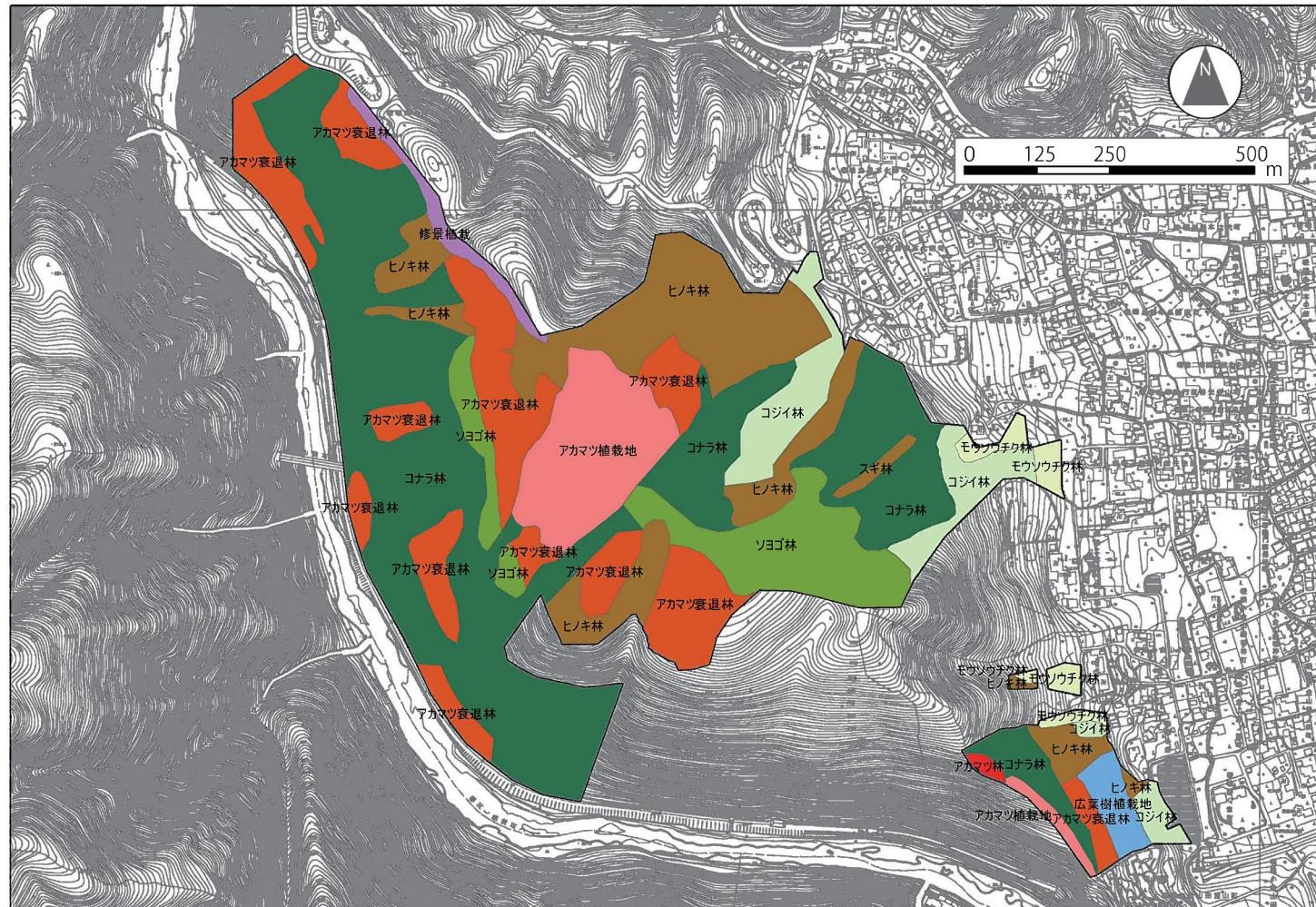
(1) 植生図作成調査（※斜面防災的価値に関する調査も含む）

前期計画で調査した結果をもとに植生図作成調査（斜面植生図）の山頂を行い、代表的な森林について次に解説した。

植生の大きな変化としてはアカマツ衰退林からソヨゴ林への変化である。これは2012年度に大きな被害がみられたマツ枯れ、ナラ枯れも伐採等の処理が行われたため、伐採前から数多く生育していたソヨゴが優占する植生景観へと変化していた。

ソヨゴは浅根性の樹木で今年の台風（平成29年10月）でも多くの木が倒れ、登山道等が通行困難となる被害もみられた。また、平成25年度からコジイの大木が大河内山荘庭園近接地や小倉池周辺で大規模に伐採が行われたことから、徐々に森林景観が改善されつつあることも特徴としてあげられる。

なお、小倉山では病害虫被害等により再生が難しいアカマツ林を再生させる取り組みも行われていることから、アカマツ林の現状をふまえ、次の3区分として整理を行った。



アカマツ林（アカマツが優占する樹林を示す）



尾根上のアカマツ林と林床の状況。防鹿柵外ということもあり下層植生はほとんどみられない。柵内ではナツハゼ、コバノミツバツツジの生育がみられる。

アカマツ林衰退林（アカマツ枯死が目立ちソヨゴ等と混生する樹林を示す）



主に急傾斜地に位置するアカマツ衰退林と林床の状況。アカマツが枯死した跡にソヨゴが優占はじめている。

アカマツ植栽地 -1,2（平成6年（左）、平成25年（右）に植栽されたアカマツ生育地を示す）



抵抗性アカマツを植栽。山頂付近では約20年が経過し樹高12mほどに抵抗性アカマツが生長している。また、山裾の大河内山荘庭園に近い場所では、4年が経過し、0.8mであった苗が2m近くに生長している。

ヒノキ林



山頂付近から北東にかけてもっと広く分布している。樹高約17mほどに生長し、本種にとって生育適地であることがわかる。

(1) 植生図作成調査

コナラ林

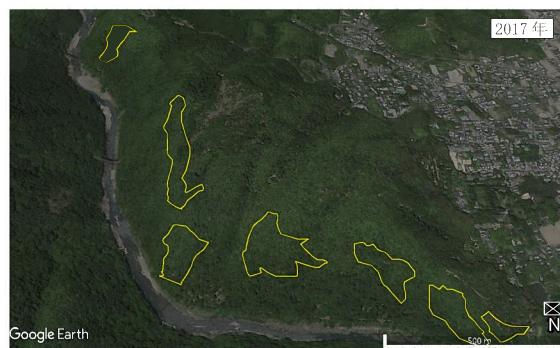


かつては小倉山で最も優占していた植生であるが、カシノナガキイムシによるナラ枯れが2011年以降進行（以下、google earth参考）し、現在では病害虫被害の影響の少なかったコナラが生育している。

■ ナラ枯れの進行と回復状況



黄色で囲った場所がナラ枯れによる枯死木がまとまってみられる場所（上：2011年）。約6年が経過し枯死木が目立たなくなつたことがわかる。樹冠の小さい樹木（ソヨゴ等）が生長している事がわかる。



ソヨゴ林



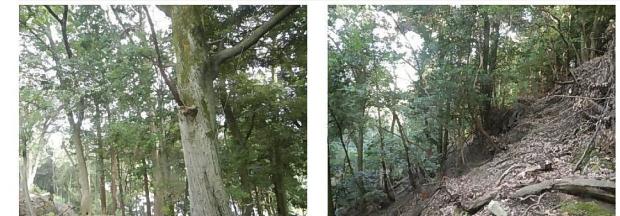
マツ枯れ、ナラ枯れ跡に生長した樹林。亜高木から低木層にかけて生育密度は高い。景観的にも見通し量が悪く、また浅根性樹木のため風倒による危険が高い。

台風21号による被害

2017年10月22日から23日の未明にかけて、大型の台風21号が京都市内を直撃し、山林内で数多くの風倒木被害がみられ、浅根性のソヨゴの風倒木が多い傾向であった。その結果、10mに近いソヨゴであっても、根は50cm内外しか地中に伸長していないことがわかった。倒伏地の地質はチャート岩・泥岩ではあったものの、表層土砂の堆積が少ない岩盤でもなかつたことから、ソヨゴの根の伸長特性であると考えられた。特に、モチノキ科の根茎の特徴は、「深部での根系生長は不良で、浅根性、水平根は発達するが広がりは小（樹木根系図説）」とされていることから、台風などの強風による倒木の影響があることから伐採を検討すべき樹種と考えられる。



コジイ林



かつてアカマツやコナラが優占していた環境で急成長し、約50年で樹高15m～18mに生長。暗い鬱閉した環境となるほか、アカマツ林の風景になじみの深い京都では、景観的にも問題となっている植生。



モウソウチク林



山裾の泥岩地に広く分布する。嵯峨野の竹林風景として維持されている場所と枯竹、倒竹が高密度でみられる場所が入り混じっている。左は川材の放棄竹林（約10年経過）、右は筍生産林（約20年経過）の放棄竹林と考えられる。

(1) 景観調査

1) 歴史的要素

ア) 景観の成り立ち

嵯峨野は古くから貴族の別生業（古代貴族の別荘）の地として営まれてきた。最も早く成立するのは、桓武天皇の行幸の目的として考えられる「大堰離宮」であり、続いて神野親王（嵯峨天皇）の嵯峨山荘、葛原親王の高田別生業、仲野親王の別生業などがあげられる。

嵯峨院が成立する頃には、双ヶ岡東麓、常盤、上嵯峨、梅津に山荘や別業が造営される。これらの別業の多くは平安時代中期に道場や寺院にかわり、大覚寺、壇林寺、清涼寺などがあげられる。

鎌倉時代以降は、浄土宗系の化野念佛寺、清涼寺、二尊院などが人々の信仰をあつめ、奥嵯峨が墓地として成立する。

鎌倉時代以降は、武家政権による禅宗寺院が嵯峨野に建立されはじめる。

特に後醍醐天皇による臨川寺、足利尊氏による天龍寺造営は嵯峨野の景観を大きく変え、歴史的建造物の趣ある景観がさらに加わった。

また、古くから多くの和歌に詠まれており、歌の中にはマツ、サクラ、モミジ等が景物として表現されている。

<マツを読んだ歌>

忍ばれんものともなしに小倉山 軒端の松ぞ慣れて久しき（藤原定家：1162～1241）
大井河川原の松にこと間はむかかる御幸やありし昔も（紀貫之：872頃～945）
よろづ代と亀の尾山の松陰を移して移してすめる宿の池水（亀山院：1249頃～1305）

<モミジを読んだ歌>

小倉山みねのもみじの葉心あれば今一度の御幸またなん（貞信公：880～949）
大井河散るもみじの葉に埋れてとなせの滝は音のみぞする（大中臣公長：1071～1138）
もみじ葉を川のこなたに吹きよせて山は嵐の音のみぞする（蓮月尼：1791～1875）

<サクラを読んだ歌>

雪降りて花かと見ゆる嵐山松と桜ぞさすが変われる（夢窓：1275頃～1351）
春ごとに思いやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ（後嵯峨院：1220～1272）
嵐山これも吉野や移すらん 桜にかかる滝の白糸（後宇多院：1267～1324）

<ツツジを読んだ歌>

躊躇（つつじ）咲く山の岩かけたばえてをぐらはよその名のみなりけり（西行：1118～1190）

以上から、嵯峨野は京都盆地の北西の奥の山辺に位置し、平安宮から隠れ籠ったような場所に位置する景勝地であった。このため世間との交流がまれな、幽閉・幽深な隠遁地として選ばれる傾向があった。嵯峨院（後に大覚寺）、棲霞觀（後に、清涼寺）、亀山殿（後に天龍寺）など代表的であり、浄土信仰が広まった平安時代末期から鎌倉時代においては嵯峨野は西方淨土に最も近い場所とみられ、出家隠棲の地となっていた。このような場所であるがゆえ、嵯峨野は詩歌や物語、近世・近代の名所案内書にもとりあげられ、著名な歌枕、名所、旧跡が集中する場所となっている。

（出典：京都・嵯峨野における景色の特徴と変遷：樋口、山口：一部改）

和歌にも詠まれた自然景観や歴史的建造物（名所、旧跡）が融合する歴史的風景価値の高い場所であることがわかり、近年では、「①史蹟名勝天然記念物保存法や文化財保護法による史蹟及び名勝指定、②都市計画法による風致地区指定、③古都保存法による歴史的風土特別保存地区」に指定されており、嵯峨野の歴史的建造物をとりまく、自然景観の保全として、行政による景観保全施策が図られている。

ここでは、歴史的建造物等をとりまく、嵯峨野の景観について検討をすることとする。

イ) 絵図（江戸時代）から遡る小倉山の森林景観

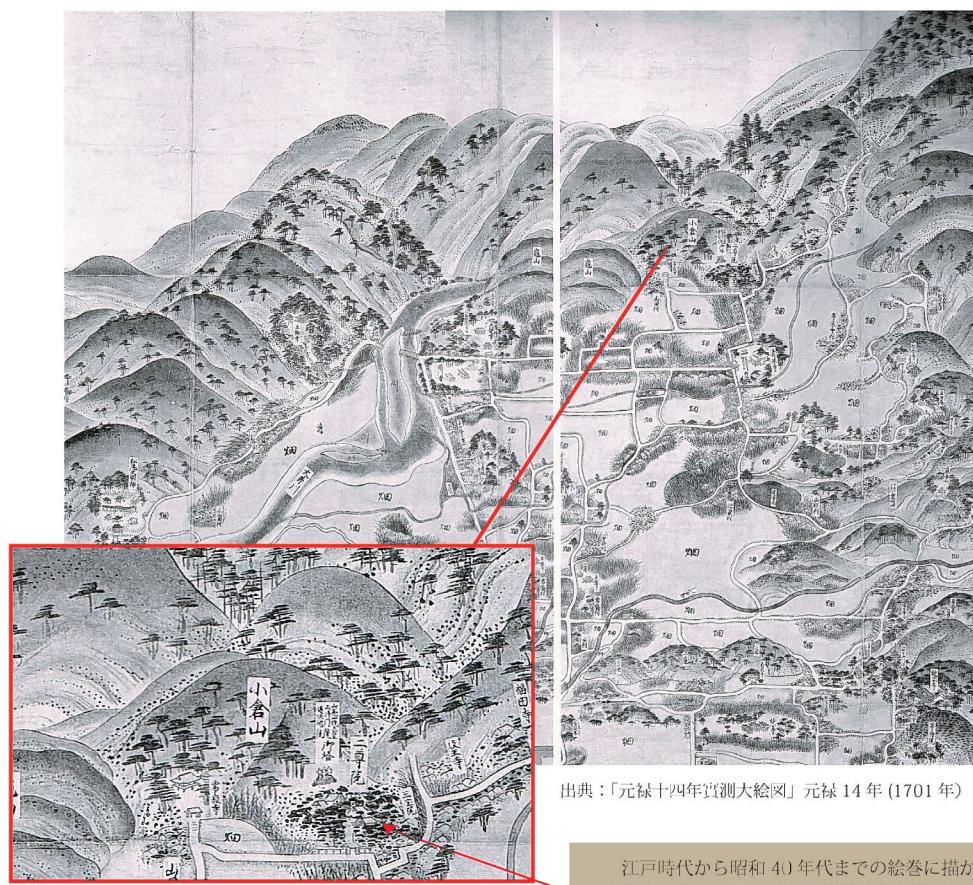
小倉山は保津川（大堰川）を隔てて、嵐山と対する山容優婉な山をいい、海拔 292m、古来歌枕として世に知られる名山である。

小倉は「小暗い」の意味で、樹木の繁茂するさまから山名となり、古くは嵐山も含めてひろく小倉山と称していたが、後嵯峨上皇が亀山殿を造営し、吉野より桜を移植して嵐山とよばれており、保津川（大堰川）北側の山のみを小倉山と称するようになった。

この山が歴史上最も有名なのは、もみじの名所として多くの歌に詠われているところにある。

「元禄十四年實測大絵図」にもあるように、古来から柴山や薪炭林としての活用がみられた場所であることから、山頂から山裾にかけてアカマツが広がっていたことがわかる。「元禄十四年實測大絵図」

また、山裾では竹林が描かれており、小倉山周辺、つまり嵐山嵯峨野では、古くから竹林との生活文化が密着していることがわかる。



ウ) 絵図(昭和)から遡る小倉山の森林景観

嵯峨嵐山は、古くから風雅の地として貴紳の間に愛された土地柄である。それと同時に多くの別荘や山荘が築かれ、巨大な寺院なども造営されたことから、古くから歴史文化の拠点として栄えてきたことがわかる。

また、そのため、嵯峨嵐山には数多くの社寺仏閣等がみられ、小倉山周辺においても、あだし野念佛寺、祇王寺、二尊院、常寂光寺、天龍寺、大河内山荘などがみられる。

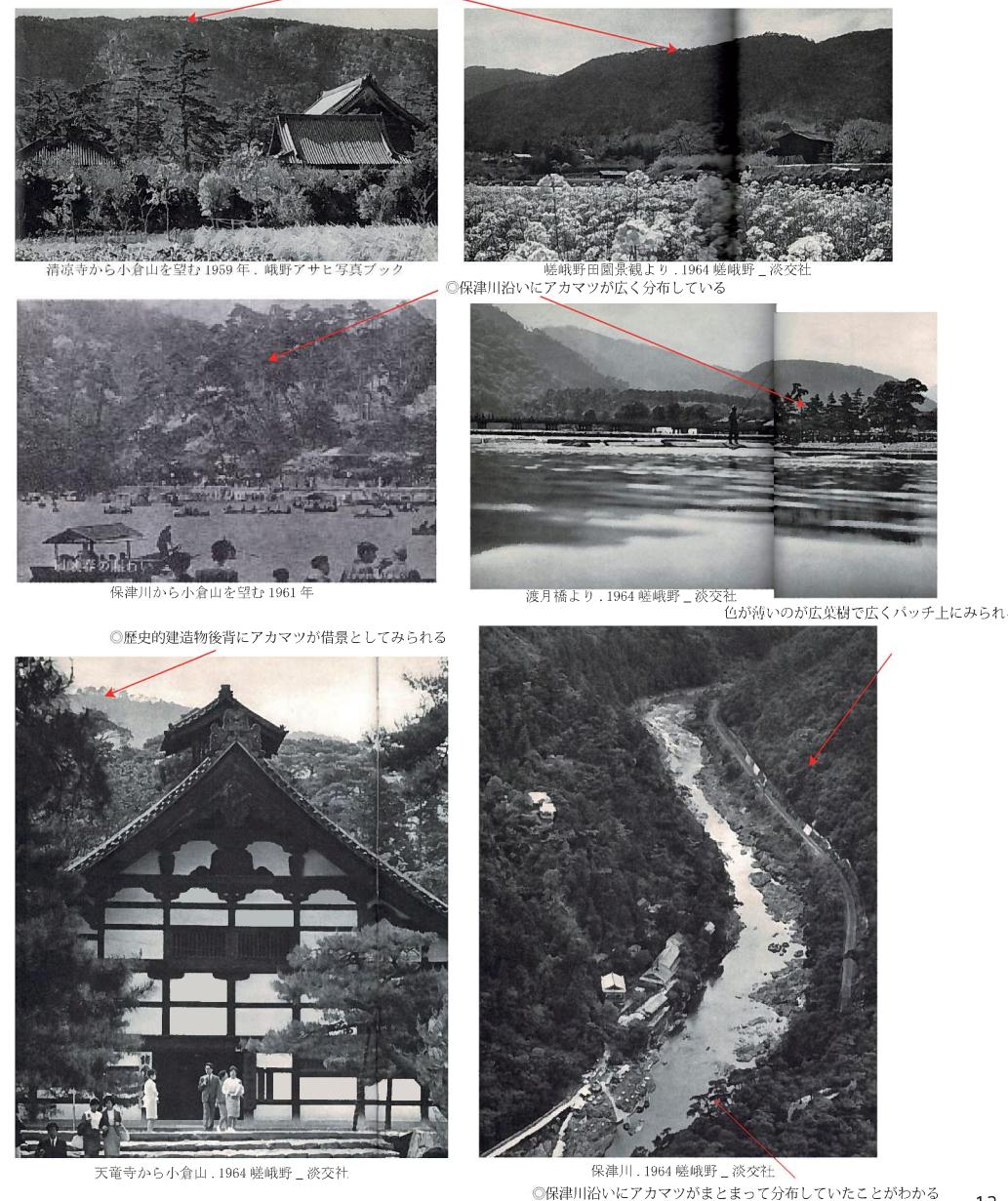
こういった寺院等では、庭園景観として小倉山の借景が取り入れられた歴史があり、京都の史跡文化を探訪した竹村俊則氏も、社寺とともに小倉山の風景を取り入れた絵を描いていることからも社寺景観としての価値がわかる。

(出典：昭和京都名所圖會（下の鳥瞰図は、昭和30年代に発刊された新撰京都名所圖會を基に、昭和30年代の風景を描いたものであると推測される）



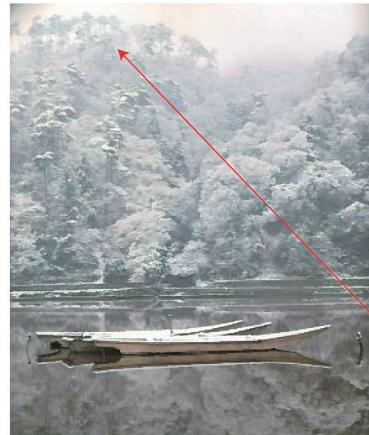
エ) 古写真から遡る小倉山の森林景観

＜昭和 30 年代＞



工) 古写真から遡る小倉山の森林景観

<昭和40年～平成初期>



大堰川（冬）1981. 太陽臨時創刊



小倉山山頂の夕映え 1981. 太陽臨時創刊



二尊院から小倉山を望む 1991 年名園京都嵯峨野

二尊院から小倉山を望む 1981 年. 山探訪日本の古寺 9



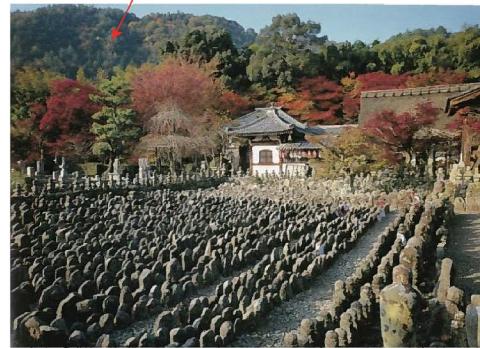
天龍寺から嵐山を望む. 2001. 京都嵯峨野

◎尾根の稜線上にアカマツが僅かに点在して残っていることがわかる（嵐山）。



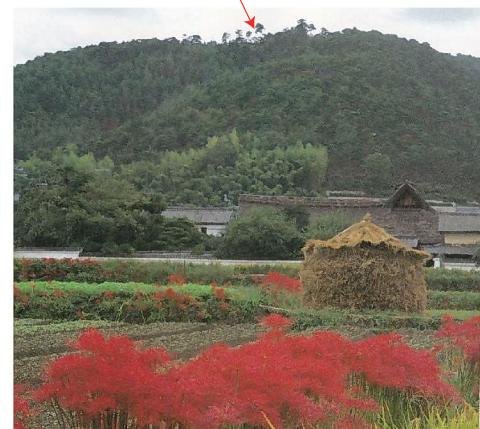
天龍寺から小倉山を望む. 2001. 京都嵯峨野

◎山麓付近ではヒノキが広がっており
現在も変わらない森林景観が維持されている



化野念佛寺から小倉山を望む. 2004. 嵐峨野紀行

◎尾根の稜線上にアカマツが点在して残っていることがわかる。



落柿舎付近から小倉山を望む. 2004. 嵐峨野紀行

◎山頂の尾根筋にアカマツが広く分布していることがわかる



山頂へ向かう眺望場. 1988 (提供: 小泉氏)

◎見通しが良く、開けた空間が維持されている。



山頂付近の様子. 1988 (提供: 小泉氏)

◎斜面地が大きく改変され、所々植栽されている。
また、遠景も眺望可能で鳴滝付近の山並みを眺望できる。



山頂付近の様子. 1988 (提供: 小泉氏)

才)「山麓寺院」「史跡及び名勝嵐山」の森林景観の課題について

史跡・名勝の景観を構成する自然的要素である森林環境への被害は「史跡及び名勝嵐山」の景観に大きな影響を与えており。特に小倉山は山麓に数多くの寺院が建立され（下図参照）、歴史と自然が織りなす重要な文化的景観を形成していることが特徴である。

また、山麓寺院からの文化的景観とともに、トロッコ列車、保津川下り、嵐山・高雄パークウェイからの観光的侧面からも価値のある景観を形成していることも特徴である。

「史跡・名勝嵐山」保津峡（①渡月橋、②保津川沿い）、山麓寺院（③天龍寺、④二尊院）、登山利用（⑤山頂へ向かう眺望場）の5つの場所（観光地利用の高い特徴的な場所）から景観の変遷を比較した。

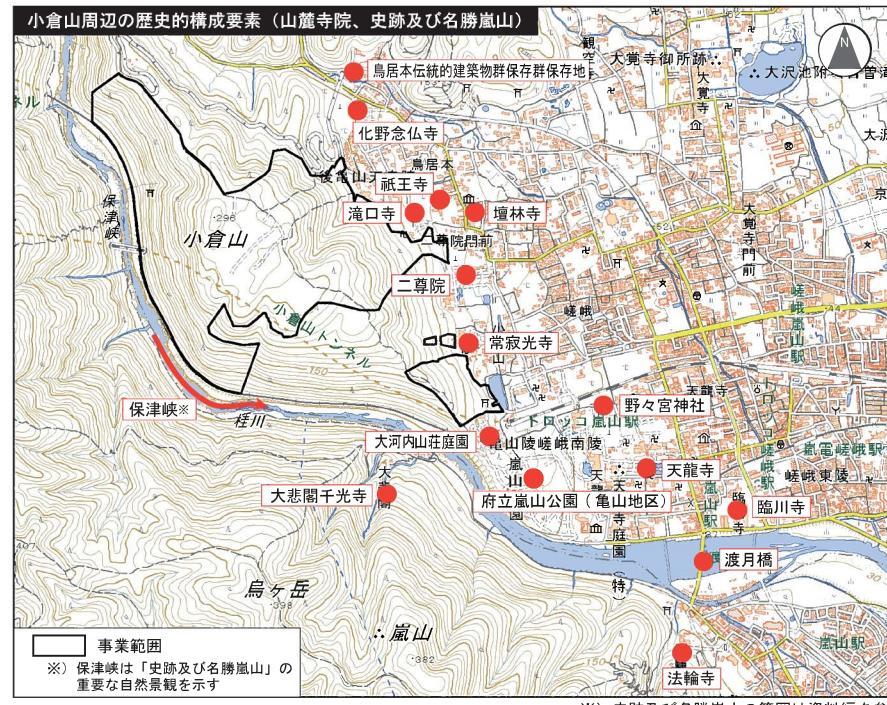
その結果、かつては稜線上や山裾に群落を形成したアカマツ林が歴史的建造物等にアクセントを与えており、小倉山の文化的景観価値を高めていたことがわかる。しかし、現在では常緑広葉樹が優占する特徴（四季の変化や樹姿のアクセント）のない森林景観となっており、山麓寺院からの文化的景観の質の低下を招いているとともに、さらには「史跡・名勝嵐山」としての価値の低下に繋がる恐れもあると考えられる。

また、登山道沿いの眺望場では樹木に生長がみられ、眺望範囲が狭まっていることから、費用対効果を検証しながら森林景観にスポットをあてた森林再生地を決定していく必要もある。

前期計画時から課題であった森林環境への被害は少しずつではあるが、森林再生事業が進み文化的・観光的景観の質が向上しつつある。

一方、後期計画をすすめる上で、年々の事業実施可能面積も限られていることから、費用対効果を検証しながら森林景観にスポットをあてた森林再生地を決定していく必要もある。

次項以降整理した景観に関わる調査では、小倉山を取り囲む山麓寺院などの歴史的要素、トロッコ列車などの観光的要素がどのような距離圏に位置しているエリアの把握、小倉山を借景として取り込んでいるエリア等を抽出し、費用対効果が高い「史跡及び名勝嵐山」の森林景観の環境保全・再生地を分析・検証を行うこととする。



※) 史跡及び名勝嵐山の範囲は資料編を参照

歴史的要素（山麓寺院、史跡及び名勝嵐山）の景観価値の低下

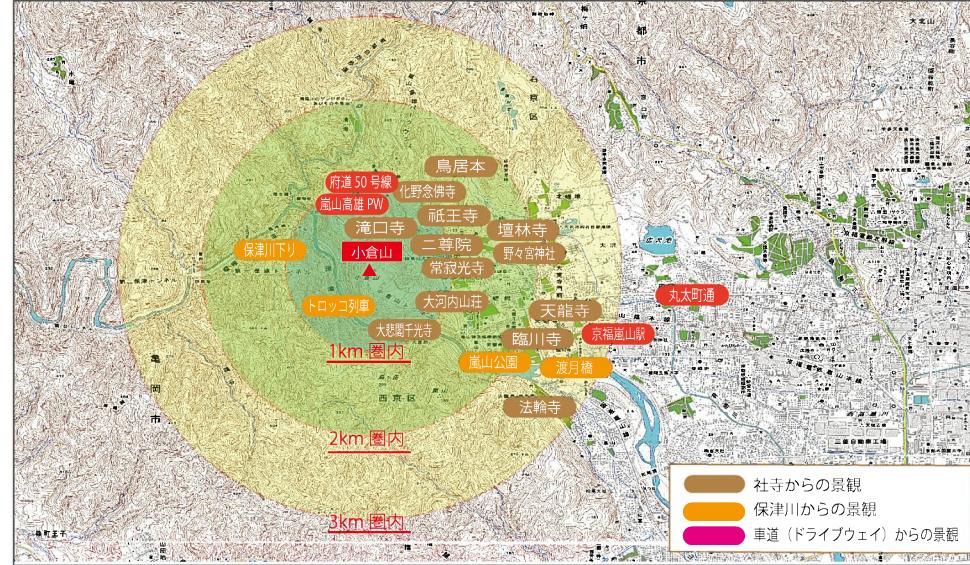


2) 自然的要素（森林景観）

ア) 景観要素

先述した文献整理結果から森林景観が山麓寺院、史跡及び名勝嵐山の文化的景観の価値を高めている重要な要素であることが明らかとなった。また、小倉山周辺の景観は、①寺社等からの景観、②保津川からの景観、③車道（ドライブウェイ）からの景観の3つの特性を備えている。

後期計画の策定見直しを行うにおいて、3つの特性から視認性が高い場所で森林再生を行うことにより、歴史的建造物、史蹟の景観価値の向上にも繋がると考えられた。そこで、事業対象地となる小倉山を拠点として主要景観要素が何km圏内に該当するかを整理し、各景観要素（視点場）からの可視領域の分析を行った結果をもとに整備効果が高い森林再生箇所の抽出を行った。



[2km 圏内からみる景観要素]

野々宮神社

竹林の小径沿いに位置する神社。小倉山の山麓は眺望できない。



壇林寺

木々の隙間から小倉山を僅かに眺望できるが、視認性は低い。



府道嵐山公園（嵐山地区）

小倉山の山裾に位置する府立公園。地域の人の散策路としても利用される。



[3km 圏内からみる景観要素]

天龍寺

山門から本堂にかけて小倉山の姿（山並み）を望むことができる。



法輪寺

嵐山の町並み景観が眺望できるが小倉山を眺望することはできない。



渡月橋

小倉山の山並みを望むことができる。対岸の嵐山と本とも地域を特徴づける重要な景観である。



京福嵐山駅

京福嵐山駅の背後に小倉山を眺望することができること。



丸太町通

遠景として小倉山を眺望することができる。



臨川寺

境内から小倉山を眺望することができる。山頂付近から稜線まで明確に視認できる。



[1km 圏内からみる景観要素]

化野念佛寺

小倉山を遠景としてとらえた場所に位置する。アカマツ、サクラなどの小倉山の森林景観を望むことができる。



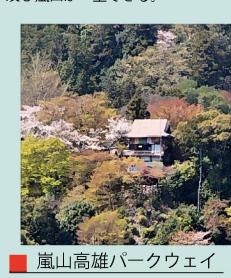
常寂光寺

社寺の緑と小倉山の緑が一体となった景観が美しい。特にモミジの紅葉が美しい。近年、コジイの成長により景観が損なわれている。



大悲閣千光寺

嵐山中腹に位置する本寺からは、保津川及び嵐山が一望できる。



嵐山高雄パークウェイ

小倉山を左手に見ながら山麓へ向かうドライブウェイが通じている。主にヒノキ植林が広がっている。



祇王寺

小倉山の山裾の緑と一体となった景観で、特に、竹林やモミジの紅葉が美しい。



大河内山庄庭園

かつては小倉山の稜線を庭園景観（借景）として取り入れていたが、現在では樹木が成長し、稜線を望むことはできない。



鳥居本

小倉山の後背に位置しており、森林と連続した景観を形成している。



嵯峨野トロッコ列車

保津川と小倉山の山裾の風景が美しいが、近年ナラ枯れの被害が著しく、景観、防災上改善する必要がある。



保津川下り

嵯峨野トロッコ列車同様に保津川と小倉山の山裾の風景が美しいが、近年ナラ枯れの被害が著しく、景観、防災上改善する必要がある。



府道 50 号線

近景として小倉山を眺望することができる。



イ) 森林景観調査

①社寺からの景観

小倉山を可視可能な寺院は、ほぼ1km圏内に位置している。小倉山と近接している祇王寺、滝口寺は竹林景観の維持が景観の改善に効果が高いが、その他寺院の多くは稜線沿いのアカマツ林の森林景観の再生が景観効果が高いと考えられた。

また、天龍寺は3km圏内と、やや遠方ではあるが、庭園や寺務所から正面に小倉山が眺望できることから、他の寺院同様にアカマツ林として森林景観の再生が景観効果が高いと考えられた。

	可視領域	現況写真	森林整備に伴う景観への効果
天龍寺			(3 km圏内) 天龍寺の借景として重要な景観要素となっている。かつてはアカマツが分布していた山頂付近に広葉樹が広がっていることから社寺と連続した特徴的な森林景観を損ねている。山頂付近の稜線が眺望できるため、稜線沿いの森林整備効果が高い。
二尊院			(1 km圏内) 山門から境内にかけてのアプローチ沿いの樹間の遠景に小倉山を眺望することができる。樹間が開けており、小倉山に近接していることから比較的山麓付近までが重要な景観要素となっている。稜線から山裾にかけて帶状に眺望できるため、比較的広域に森林整備効果は高い。
常寂光寺			(1 km圏内) 小倉山に近接しており、山門横の駐車場へ向かうスロープ沿いから最も小倉山を眺望することができる。山頂付近の広葉樹が特徴のない森林景観を形成している。特に、山頂付近の稜線が眺望できるため、稜線沿いの森林整備効果が高い。
化野念佛寺			(1 km圏内) 小倉山に近接しており、境内の石仏・石塔群が立ち並ぶ開けた空間の後背に小倉山を眺望することができる。主に植林と広葉樹(コジイ)が広がる景観となっており、四季の変化がみられない。稜線から山裾にかけて広域に眺望できるため、森林整備効果は高い。
大河内山荘庭園			(1 km圏内) かつては、庭園からの借景景観として小倉山のアカマツ林が眺望できたとのことだが、現在では近接する樹木も生長し小倉山を眺望できる場所は一部の場所に限られる。特に、山頂付近の稜線が眺望できるため、稜線沿いの森林整備効果が高い。
大悲閣千光寺			(1 km圏内) 保津川対岸から小倉山広域を眺望できるが、事業対象地としては一部の場所のみである。かつてはアカマツが分布していた稜線沿いに広葉樹が広がっていることから特徴的な森林景観を損ねている。稜線沿いの森林整備効果が高い。

	可視領域	現況写真	森林整備に伴う景観への効果
鳥居本伝統的建造物群保存地域			(1 km圏内) 小倉山を後背に確認することができ、古民家と化野の風景を構成する重要な森林景観として位置づけられる。ただし、今回の事業対象地は視認することができない。
祇王寺			(1 km圏内) 小倉山と連続した森林景観を形成している。近接地では竹林が分布しており、祇王寺の重要な景観要素となっている。平成27年度に整備済み。
滝口寺			(1 km圏内) 小倉山と連続した森林景観を形成している。近接地では竹林が分布しており、隣接する祇王寺とともに滝口寺の重要な景観要素となっている。平成27年度に整備済み。
法輪寺			(3 km圏内) 岩田山と連続する法輪寺の展望場所からは市内を一望できるが、小倉山方向へは岩田山の森林に遮られていて眺望することができない。
壇林寺			(2 km圏内) 庭園内の木々の隙間から僅かに小倉山の森林の一部を眺望することができるが、視認性が低いことから、森林整備による景観効果は少ないと考えられる。
臨川寺			(3 km圏内) 臨川寺の借景として重要な景観要素となっている。小倉山とその後背の愛宕山と連続した森林景観を形成している。山頂付近の稜線が眺望できるため、稜線沿いの森林整備効果が高い。
野々宮神社			(2 km圏内) 嵯峨野の特徴の一つである竹林と連続した景観を呈している。小倉山を視認することができないことから、森林整備による景観効果は少ないと考えられる。

イ) 森林景観調査

②保津川からの景観

保津川からの景観は観光景観としての要素が高い。

特に、府立嵐山公園（亀山地区）、トロッコ列車及び保津川下り沿いについては近景として小倉山が眺望可能なことから、アカマツなどの森林景観のコントラストとともに、四季彩りを感じる景観改善効果が高いと考えられる。

	可視領域	現況写真	森林整備に伴う景観への効果
府立嵐山公園（亀山地区）			(2 km圏内) 公園内には保津峡を望むことができる展望場があり、保津川沿いの小倉山の森林景観を望むことができるが、眺望可能エリア内で事業対象地は一部の地域に限られる。現状では、アカマツが僅かにみられるが広葉樹が優占している。眺望場としての森林整備効果は高い。
トロッコ列車			(1 km圏内) 小倉山沿いを走るトロッコ列車は、観光地としての森林景観の影響が大きい。 かつてはアカマツやその構成種であるツツジ類が生育していたと考えられるが、現状はアラカンなどの常緑広葉樹となっている。四季彩の森林再生を行うことにより、観光地としての景観改善効果が高い。
保津川下り			(1 km圏内) 保津川沿いを船で下る保津川下りは、トロッコ列車同様に観光地としての森林景観の影響が大きい。 かつてはアカマツやその構成種であるツツジ類が生育していたと考えられるが、現状はアラカンなどの常緑広葉樹となっている。四季彩の森林再生を行うことにより、観光地としての景観改善効果が高い。
渡月橋			(3 km圏内) 渡月橋からの小倉山の森林景観は対岸の嵐山とともに、本地域を代表する景観である。 小倉山を一望できることから、かつてはアカマツの森林景観がアクセントとなる眺望景観を呈していたが、現在では広葉樹が広がる特徴のない景観となっている。観光地としての景観改善効果が高い。

③交通機関等（ドライブウェイ）からの景観

車道等からの景観では、嵐山高雄パークウェイ及び府道50号線沿いは、小倉山が近接しているため四季彩による景観改善効果が高いと考えられるが、車の移動スピードが30 kmほどであるとすると、ツツジやモミジ、サクラなどがまとまって彩りを与えるないと視認性が低いと考えられる。

また、京福嵐山駅、丸太町通は3 km圏内と遠景であることから、尾根のアカマツ林の森林景観改善などが効果が高いと考えられる。

	可視領域	現況写真	森林整備に伴う景観への効果
嵐山高雄パークウェイ			(1 km圏内) 嵐山高雄パークウェイ入口から隣接する小倉山の斜面地が事業対象地である。 現状ではヒノキ植林やコジイ林が分布していることから観光地としての四季彩の景観要素が少ない。 車による移動スピードで視認できる森林整備こそが効果が高い。
京福嵐山駅			(3 km圏内) 嵐山、小倉山ともに重要な景観要素となっている。 かつてはアカマツが分布していた山頂付近に広葉樹が広がっていることから特徴のない森林景観となっている。山頂付近の稜線が眺望できるため、稜線沿いの森林整備効果が高い。
府道50号線			(1 km圏内) 小倉山に近接して府道50号線が走っており、家屋や森林の途切れた場所で断片的に小倉山を広く眺望することができる。現状ではヒノキ植林やコジイ林となっており四季の変化がみられない。稜線から山裾にかけて広域に眺望できるため、森林整備効果は高い。
丸太町通			(3 km圏内) ビル等の建築物の狭間から遠景として小倉山を眺望することができる。かつてはアカマツの森林景観がアクセントとなる眺望景観を呈していたが、現在では広葉樹が広がる特徴のない景観となっている。 稜線から山裾まで広域に視認できることから、森林整備効果は高いと考えられる。

ウ) 景観（可視領域）分析結果

山麓寺院や史跡名勝嵐山としての景観、トロッコ列車、保津川下り、嵐山高雄パークウェイなどの観光動線沿いの景観として森林整備効果が高い場所を抽出するため、広域景観、近景景観の2つの側面から可視領域を分析した。

※右図はGIS(Geographic Information System)及びGoogleEarthを活用して可視領域を作成

1. 広域景観

渡月橋から小倉山を望むことができる事業地範囲（京都市市有林）を代表的な広域景観として以下、整理した。

その結果、正面側の山裾の植生、山頂付近の稜線沿いの視認性が高いことが明らかになった。植生タイプでは正面の山裾ではアカマツ植樹地（エリアNo①）が最も視認性が高く、稜線上のアカマツの森林再生による景観改善が効果が高いと考えられる。

また、東側の斜面地では稜線上のソヨゴ林（エリアNo②）が最も森林再生による効果が高い。次に山裾にかけて帯状に延びるコジイ林の森林再生が効果が高いと考えられるが、その手前側の事業区域外の森林の優占種もコジイであることから、一部の場所を森林再生しても、整備効果のインパクトはやや弱いと考えられる。

2. 近景景観

保津川沿いの観光動線、山麓寺院からの景観を代表的な近景景観として以下に整理した。

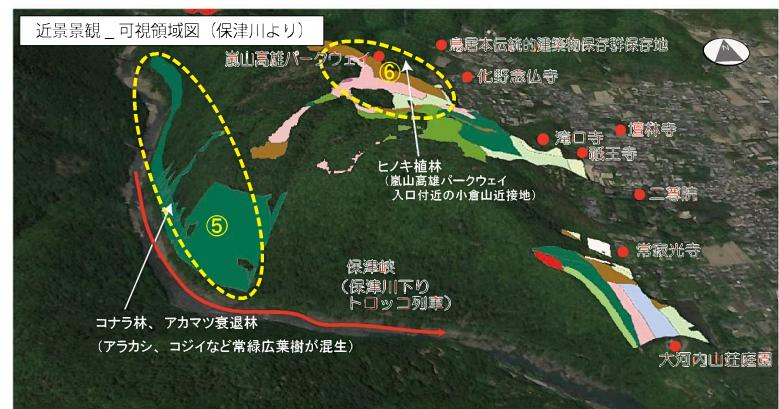
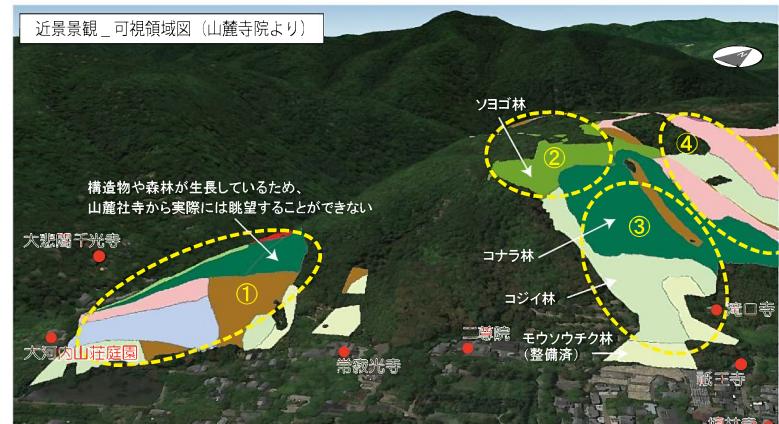
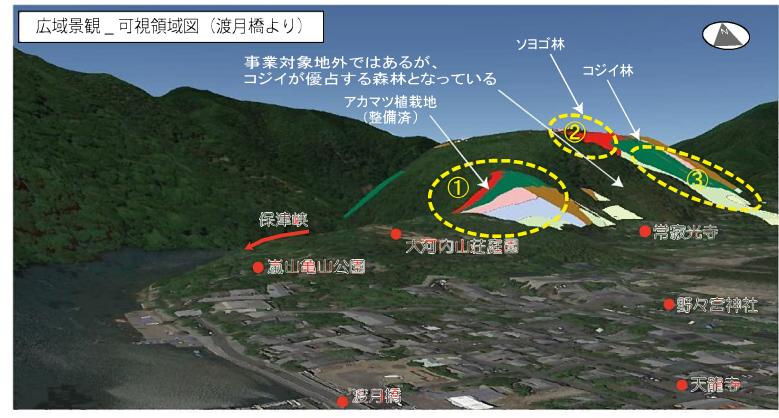
その結果、主に1km内の寺社からの景観で視認性が高かったのは稜線上のソヨゴが優占する森林である（エリアNo②）。また、稜線に近いソヨゴ林と接したコナラ林（エリアNo③④）も視認性が高く、森林再生による景観改善が効果が高いエリアと考えられる。

また、保津川沿いは、トロッコ列車や保津川下りの観光動線で小倉山を眺望できる景観が連続する。

現況ではコナラが優占する森林となっているが、アラカシ、コジイなど常緑広葉樹が混生しており、観光動線として四季彩のある森林景観として再生されることにより、森林再生効果が高いと考えられる（エリアNo⑤）。

嵐山・高雄パークウェイ沿い（エリアNo⑥）では、ゲート入口が小倉山事業地の近接地となり、現在ではヒノキ植林となっている。特に荒廃した景観ではないが、観光動線上で四季彩の効果ある整備を実施する場合は、車の走行速度にあつたサクラ、モミジ、ツツジなど季節限定でも彩のある樹種をまとめて植栽することにより、森林再生効果が高いと考えられる。

エリアNo	森林景観と関わりのある要素	主な現況森林	広域景観評価	近景景観評価
①	天龍寺 渡月橋	アカマツ植栽地（整備済）	既整備地の抵抗性アカマツ植栽木が生長することにより、庭園からの借景景観として効果が高い。	—
②	天龍寺、念仏寺、大河内山荘庭園 府立嵐山公園（亀山地区）、渡月橋、京福嵐山駅、丸太町通、府道50号	ソヨゴ林 コナラ林	稜線上にアカマツ林が再生されると庭園からの借景景観として効果が高い。	—
③	天龍寺、二尊院 渡月橋、京福嵐山駅、丸太町通 府道50号	竹林（整備済） コナラ林 コジイ林	山腹斜面が眺望可能であることから四季彩のある森林の再生効果が高い。	竹林整備地。山麓寺院と連続した竹林景観が再生された。
④	祇王寺、滝口寺、壇林寺、念仏寺 二尊院、常寂光寺 京福嵐山駅、丸太町通、府道50号	コジイ林（整備済） コナラ林 ヒノキ植林	山地斜面が眺望可能であることから四季彩のある森林の再生効果が高い。	コジイ林整備地。四季彩のあるモミジ等が植栽された。時間をかけて森林景観を再生する。
⑤	大悲閣千光寺 トロッコ列車、保津川下り	アカマツ衰退林 コナラ林	—	山地斜面が眺望可能であることから四季彩のある森林の再生効果が高い。
⑥	壇林寺、念仏寺 嵐山高雄パークウェイ	コジイ林 ヒノキ植林	—	車の走行スピードから認識可能な四季を彩る樹林群としての森林の再生効果が高い。



※山裾付近は、広域景観同様に建物と樹木の高さあるデータは反映されていないので可視想定領域である

3) 林内景観（登山道沿いからの景観）に関する調査

府立嵐山公園（亀山地区）近いエリアを重点的に明るい環境へと整備したことから、公園から山へと足を踏み入れ、自然景観を楽しみながら眺望場所までハイキング利用する観光客も増えた。

また、春には明るくなった環境でコバノミツバツツジが咲き誇るようになり、秋にはナツハゼ、ネジキなどの紅葉といった四季を感じられる景観になりつつある。

こういった自然景観の向上に伴い、ハイカー利用も増え、多くのハイカーは六丁峠を目指す周回コースを利用している（東海自然歩道や京都トレイルのコースにもなっていることから知名度があがりハイカー利用が増えたことも影響している）。

また、登山道沿いに位置する山頂付近のアカマツ植栽地は平坦で開けた空間でもあることから休憩場、昼食場としても利用される光景をよく見かけるようになり、小倉山が登山としてのレクレーション利用が高まり、観光地化してきていることがわかる。

しかし、登山道沿いに魅力があるかというと、ソヨゴ、コジイ、アラカン、ヒサカキなど常緑広葉樹が優占し鬱蒼とした場所も多く、ハイカーの目を楽しませている林内景観としての視点では景観改善する課題も多くみられる。

特にソヨゴは浅根性樹木であることから風倒による被害を受けやすく、防災的にも林相改善を図る必要性が高い。

もう1つの問題として、山林内を縦横無尽に通る登山道を利用するハイカーが道に迷う光景をしばしば目にする。

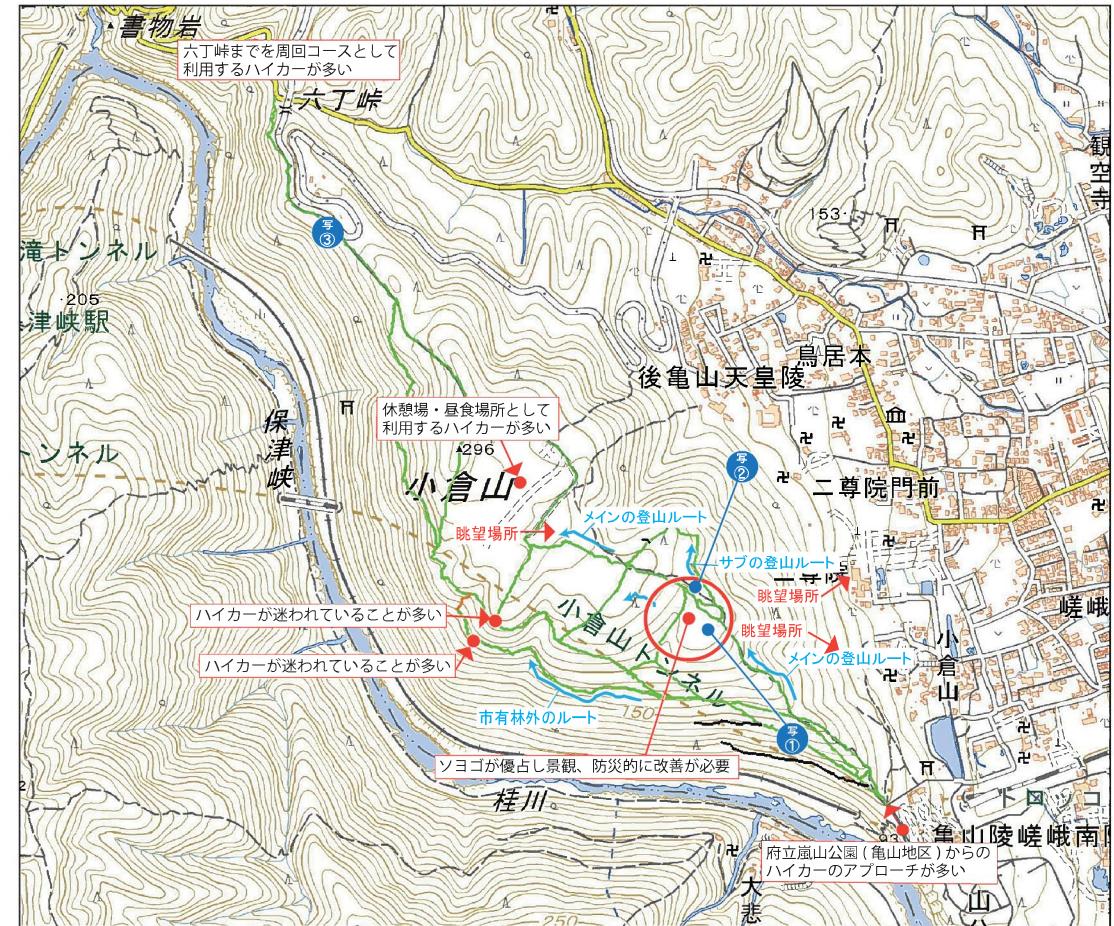
ハイカー利用が増えたため、登山道を明確化し、ハイカーを適切に案内する必要がある。

さらに、現状では林内景観を楽しみ、市内を眺望できる数地点の景観ポイントが点在する。保津川渓谷を眺望できる登山道があれば、小倉山周辺の魅力ある景観をハイカーとしても満喫でき、登山道としての林内景観の魅力が向上すると考えられる。



- | | |
|---|---|
| ① | ② |
| ③ | ④ |
- ①山頂付近まで登山をする外国人観光客
 - ②府立嵐山公園（亀山地区）から小倉山の紅葉に魅せられて山林内を探検する外国人観光客
 - ③健康のために週2回は六丁峠まで歩く地元のハイカー
 - ④道に迷われたため、看板で位置を確かめる日本人観光客

[林内を縦横無尽に通る登山ルートと特徴]



写



ソヨゴが優占する森林、景観的にも鬱蒼としており林相改善が望まれる。

写



ソヨゴは浅根性の樹木であるため、台風等による風倒被害が多い。

写



六丁峠付近の嵐山・高雄ドライブウェイ合流箇所、京都トレイルのサインもみられる。